

特集:ミュンヘン・ハイエンドショー 2016

High End 2016 in Munich

=第 35 回を迎えたハイエンドの新しいトレンド=
 ~アナログ復興とヘッドホン台頭にオーディオ活性化を期待する~

森 芳久 編集委員

今年も恒例の『音の祭典』ハイエンドショーがミュンヘンの M.O.C で 5 月 5 日～9 日の 4 日間開催された。今年第 35 回を迎えたこのハイエンドショー、会場スペースも昨年の 27,610m²から 28,610 m²と 1,000 m²広くなり、また出展社数も 506 社から微増あるが 518 社に増えたことなど、関係者はもちろん業界がこぞってこのショーを盛り上げてきたことがはっきりと伺える。



ハイエンドショーが開催された M.O.C 会場 (写真右) と会場内 (写真左)

毎回レポートしていることであるが、このショーの主催者ドイツ・ハイエンド協会がホテル業界や他の関連機関などと密接な連携をはかりこのショーを盛り上げ、また世界中のオーディオメーカーやプレスに対して徹底した広報活動を行っていることが、今日世界最大のオーディオショーの地位を獲得した要因であることは間違いない。事実、ミュンヘン市内の地下鉄の駅構内などでも、このショーのポスターが掲げられていた (写真 1)。



写真 1. 主要地下鉄駅エスカレーターの壁に貼られたハイエンドショーのポスター

また、国内外のプレス関係に対してはショーの見所や新製品情報、各種講演などの詳細が逐一配信され、事前準備や取材する上でも大きな助けとなっている。加えて、遠方から訪れる人のための宿泊施設の特別価格斡旋、期間中空港や提携ホテルと会場間の定期無料バス運行などの便宜が図られているのも嬉しいサービスだ。特に感心するのが無料で配布されるショー会場の案内マップやショーのハイライトなどを記載した 2 種の小冊子 (High End Magazin) さらに有料 (12 ユーロ)

で販売される本格的カタログなどが完備していることである。この有料カタログは464ページもの分厚いもので、出展社名やブランド名、また製品カテゴリーから出展ブースを検索できる他、今年の主な製品の情報や見どころなどが満載されている。この一冊で今年のハイエンドショーの傾向を知ることができる貴重な資料である(写真2)。

このハイエンドショーはこのところ年々盛況で規模が大きくなり続け、今年も報道関係者数、業界関係者数などは堅調に伸びたが、残念ながら一般入場者数が昨年を12%も下回る結果となり、2014年と同じ水準となった。トータル来場者数もマイナス6%と近年はじめて前年を割る結果となった。会場内で見ると昨年より来場者が少ないという感じは無かったが、土日の午後の来場者の引きが例年より早かったという印象は否めなかった。

5月12日には、ドイツ・ハイエンド協会より下記の来場者などの数字が発表された(表1)。

	2014年	2015年	2016年	前年比%
会場スペース	26,500m ²	27,610m ²	28,610m ²	4%
出展社数	452	506	518	2%
報道関係者数	482	504	516	2%
業界関係来場者数	5,387	6,588	7,053	7%
一般来場者数	12,468	14,079	12,436	-12%
来場者数計	17,855	22,667	19,489	-6%

表1. いつもながらこの来場者の数は516名の報道関係者、2,945名の出展社バッチを持つ入場者の数は含まれていない。また、この数字は第三者機関による厳正な数字であることを付け加えておく

さて、今年の大きな傾向はアナログディスクの復興とダウンロードミュージックそしてポータブルオーディオ/ヘッドホンの台頭である。それは今回のショーの頒布カタログやポスターにはっきりと表されている。そこには、スピーカーを中心に、ヘッドホン(イヤホンを含む)、アナログプレーヤー、ダウンロードミュージック、そしてハイレゾDACが描かれ、それらが今年の主役と位置づけられているかのようだ。確かに、今年のハイエンドショーでは例年よりこれらのコンポーネントや製品の数が増えているのに驚かされた。サウンドデモのプログラムソースのSA-CD/CDプレーヤーが激減し、アナログディスク、そしてPCによるダウンロードミュージックが主流となってきている。



写真2. このショーのための頒布パンフレットやカタログ。ポスターと同じコンセプト写真が表紙を飾っているが、ここに描かれているコンポーネントがまさに今年のショーのトレンドを物語っている

このためか、多くのブースでアナログプレーヤーの新製品やサウンドデモに遭遇した。例年好評のアナログディスク販売コーナーの出展も多くなり、今年はさらに賑わいをみせていた。さらに一昨年より登場したオープンリールのアナログテープがあちらこちらのブースで使われ、また 2 トラック 38cm/s テープの新譜が多くのレーベルから発売されていたのも興味深い現象であった。

一方、ダウンロードミュージックそしてそれを手軽に楽しむためのポータブル DAP も増え、高級ヘッドホン、イヤホンとの組み合わせで新しい高音質オーディオを楽しめる土壌が確実に広がっているのが実感できた。同時にヘッドホンアンプやヘッドホン用 DAC、ヘッドホン用に特化したフォノイコライザー組み込みアンプなどの新製品が数多く見られたのも今年の新しいトレンドであった。またハイレゾ音源を楽しむための高性能 DAC が多くのメーカーから発売され、128fs、さらに 256fs の DSD のサウンドデモが来場者の関心を集めていた。

残念ながらこの会場では、日本オーディオ協会が推進しているハイレゾマークが日本メーカーの製品以外にはほとんど見かけられず、来場者や出展社に尋ねてもこの日本発のマークに対する反応は鈍いものであった。幸い、英国の MERIDIAN がこのハイレゾマークを訴求してくれていたのは心強いことであったが（写真 3）、まだまだ世界に向けて日本オーディオ協会が働きかけを強める必要があると痛感した次第である。



写真 3. 日本オーディオ協会が推進するハイレゾマークもこのショーに登場しているが、残念ながらまだまだ認知度は低い

このショーの会期は毎年キリストの昇天祭（ドイツでは祝日）から週末までの 4 日間となっている。今年は 5 月 5 日とその昇天祭となり暦では例年より早めの開催となった。このショーの初日の入場者は業界関連者に限られ、一般の入場は 6 日から 8 日までの 3 日間となっている。しかし、ショーは初日から熱気に溢れ開場前から列ができ、4 箇所のホールそれぞれのエントランス前は大勢の人々で賑わいを見せた（写真 4）。

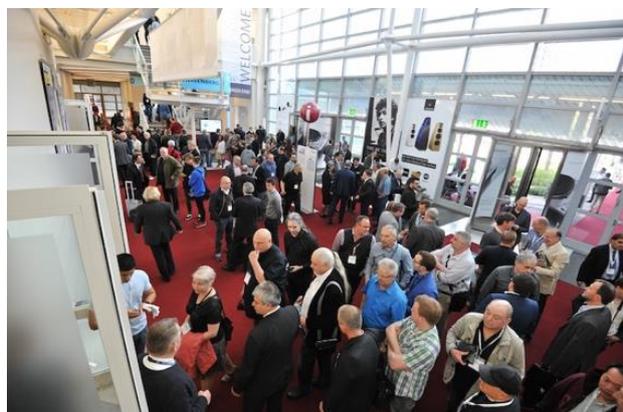


写真 4. エントランス前は大勢の来場者で賑わった



写真 5. ハイエンド協会のプレスカンファレンス。協会最高責任者、Kurt W. Hecker 会長（左から 2 人目）、と Branko Glisovic 理事長（左から 3 人目）

初日にはハイエンド協会のプレスカンファレンスが開催された。ここでも、新しいマーケットである高音質のダウンロードミュージックやそれを聴く新しい機器の登場、ポータブル DAP やヘッドホンなどの台頭、そしてアナログ回帰など多様化するマーケットニーズに期待すると同時にハイエンド協会としてもそれらをサポートしていく姿勢が熱く語られた（写真 5）。

それでは今年のショーの特徴的なところをご紹介しよう。まず会場レイアウトであるが、1 階フロアに Halle1 から Halle4 まで 4 部屋の大きなホールがあり、それぞれのホールにコマで分けられた各社のブースが設けられている。ブース前の通路には ROLLING STONES WAY または MILES DAVIS AVENUE など著名演奏家の名前が付けられ楽しさを演出している（写真 6）。さらに個室と中央広場がある 3 つのアトリウムが 2 階と 3 階に設けられている。こちらの個室では比較的大きな音でサウンドデモができること、また来場者もゆっくりと試聴できるため、どこの部屋も満員となる盛況ぶりであった（写真 7）。

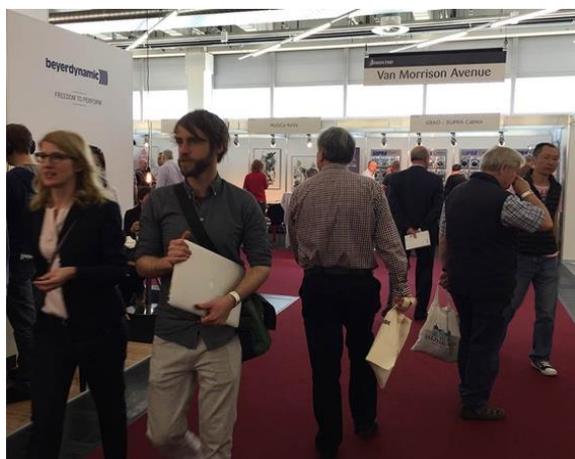


写真 6. ホールの通路標識



写真 7. いつも盛況を誇る avantgarde のブース

この数年ハイエンドショーでもアナログ回帰の声が強く聞かれていたが、今年は確かにアナログディスクやアナログテープそしてそれらの機器を全面に打ち出してきたメーカーが多かった。特に今年は超高級機種でなくてもアナログ関連の商品展示やデモが目立った（写真 8～11）



写真 8. 中級から高級機種まで数多くのラインナップを展示した Pro-Ject のブース

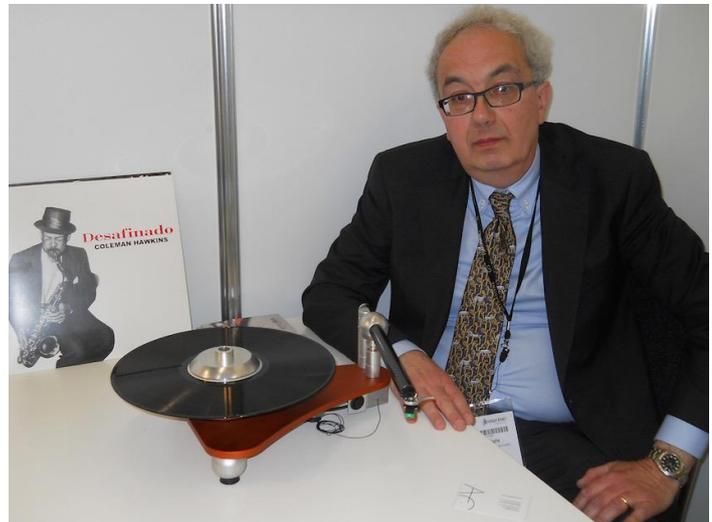


写真 10. 今年の目玉的なアナログ製品が Audio-Technica の MC カートリッジ AT-ART1000 だ。ネーミングもさることながら巨大な展示模型からも同社の意気込みが感じられる



写真 10. ナガオカの交換針やアナログディスク関連のアクセサリーを扱う Tonar の Glenn Libgott 社長夫妻。昨年度は前年に比べ針とディスク関連ビジネスが倍増したとのこと。彼は「アナログの魅力は一言でいえば暖炉を囲むようなもの」と付け加えてくれた

写真 11. もう一点風変わりなレコードプレーヤーを発見。イタリア Audiodeva 社の Atmo Sfera、その名も”原子の球体”だ。三角形の台座に載せられたターンテーブルの無いモーターでレコード盤挟んで演奏する。設計者の Paolo Caviglia 氏によればターンテーブルの共振が音に影響するのを避けるためターンテーブルレスとしたとのこと。果たしてその成果は？



そして、今年も恒例のアナログディスクや高音質 SA-CD/CD の販売コーナーが賑わったが、特にアナログディスク販売コーナーの数や規模が大きくなりアナログ回帰現象がここにも見られた。(写真 12a, b)。



写真 12a, b. 今年も賑わいを見せたアナログディスク販売コーナー

アナログディスクの人気に合わせてアクセサリ関連も多く見られたが、特に今年はディスククリーナー製品が多く見られた（写真 13a, b）



写真 13a, b. 日本でもお馴染み米国 KLAUDIO 社のレコードクリーナー CLN-LP200（左）とドイツ AUDIODESKSYSTEM GLASS の VINYL CLEANER（右）。どちらも超音波でレコード盤をクリーニングする優れたもの

さらにアナログ復興はディスクだけではなく、アナログテープによるサウンドデモが増え、またオーディオレーベルから続々とアナログテープのソフトが発売されるなど、今年は新しいトレンドが誕生したと言っても良いだろう（写真 14～17）。



写真 14. イタリアのオーディオレーベル fone から 42 本ものオープンテープソフトが販売されることになり注目を浴びていた



写真 15. ANALOG AUDIO, INC ではアナログのオリジナルテープからアナログコピーやハイレゾデジタル信号への変換サービスを行うビジネスを始めた。同社 Leslie Brooks 社長（左）と Playback Design 社の Heinz-Peter Gerlach 氏。この Playback Design 社は業務用 DSD 録音機 SONOMA を開発した Andreas Koch 氏が社長を務め、優れた A/D また D/A コンバーターを製造している



写真 16. Hemiolia Records のオープン
テープ新譜展示とデモ



写真 17. ここでもプログラムソースは
オープンテープだ

今や、ヘッドホン、イヤホンそしてヘッドホンアンプやポータブル DAP なども完全にハイ
エンドショーの市民権を得て、それらのブースには例年に増して活気にあふれていた。また会場
ホワイエにイヤホンの大きなポスターを掲げるところもあり、これらは完全に主要カテゴリーと
なってきたように思われた (写真 18a,b、写真 19a,b、写真 20、写真 21a,b)。



写真 18a, b. 大勢の試聴者で賑わうヘッドホンのブース



写真 19a, b.
会場ホワイエに掲げられた final の
ポスターと同社の新製品 LAB-2 を
熱心に聴く Polyhymnia Records の
レコーディングエンジニア
Jean-Marie Geijsen 氏



写真 20. Questyle の新製品レファレンスシステム。上から電流型プリアンプ、DSD/A コンバーター、電流型ヘッドホンアンプ。同社の海外営業課長 Olina さんをモデルにワンショット



写真 21a, b. ポータブル DAP では世界的に大きなシェアを持つ Astell&Kern。6 日の午後そのブースでパーティーが開かれ、そこで新製品 Astell&Kern 特性ビールが振る舞われた。これもショーの楽しみだ。社長 Henry さんの満面の笑顔がショーの大成功を物語る

ハイエンドと冠するこのショーの王座は超弩級のハイエンド商品やスピーカーなどであることは言うまでもない。今年もスピーカーなどに面白いものが見られた（写真 22、23）。



写真 22. 自社開発のフルレンジユニットを特徴とするドイツの VOXATIV。最近真空管アンプも手がけ、日本製のトランスを積んでいるようだ。シングルユニットならではの端正な音に仕上がっていた



写真 23. これもドイツの Kawero Classic スピーカー。リボンツイターの音が魅力



写真 24. このショーで最も高品位の音を再現していたのがドイツ MBL だ。フラッグシップモデル mbl 101 X-treme スピーカーをレファレンスラインの巨大アンプで駆動、その余裕のある音を聴かされるとやはりオーディオはパワーだと思ってしまう。ここでは演奏家自らが自分のディスクの聴きどころを説明しながらサウンドデモをしている。写真はドイツのピアニストで優れた録音ディスクをリリースしている Martin Vatter 氏の MBL ブースに於ける講演の様

Martin Vatter 氏 (<http://www.martin-vatter.de/>)

一方、ハイレゾダウンロードミュージックに対応するストレージ機器や USB-DAC など今年も目立ってきていた (写真 25、写真 26、写真 27)。

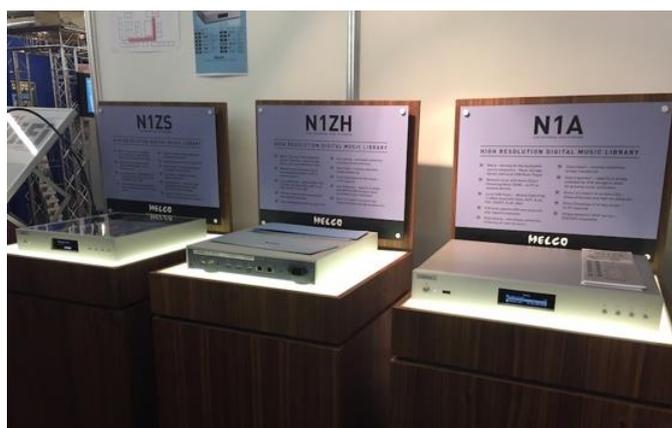


写真 25. MELCO の Music Store and Server、USB-DAC



写真 26. Merging Technologies の Native DSD DAC と技術セールス担当の Chris Holleb 氏



写真 27. MYTEK ブースで今井商事の今井社長を発見。MANHATTAN II の評判もなかなかのこと

このハイエンドもここ数年は韓国メーカーが激増してきたが、SAMSUNG も登場 (写真 28)。



写真 28. SAMAUNG が小さなブースながらホールの平場に登場



写真 29. ポルシェに搭載された Burmester のカーオーディオ

ドイツの大手ハイエンドメーカーBurmester のカーオーディオコーナー。ポルシェやブガッティなどの高級車に装着されたオーディオシステムは一聴に値する。昨年 8 月 Diter Burmester 社長の訃報がハイエンド協会とオーディオ関係者に大きなショックを与えたが、Diter 氏の意味は今年も素晴らしい新製品として会場を飾っていた (写真 29)。

そして、今年の大サプライズは、元 MBL の創業者で優れた技術者 Wolfgang Meletzky 氏が開発した超弩級の安定化電源ユニット STROMTANK だ。彼に久しぶりに会えたのも嬉しかったが、彼がまた新しい技術開発に取り組んでいることに感動した。大型バッテリー内蔵の電源ユニットで、ヨーロッパでは 6 月より発売予定で一台 32,000 ユーロ (約 400 万円)。既に日本にも輸出が決まったとのこと、やはりオーディオは贅沢な趣味なのだ (写真 30)。



写真 30. Wolfgang Meletzky 氏開発の STROMTANK。120kg とその重さも超弩級だ



写真 31. EAR/Yoshino Trading のブースの Lyn Stanley さん

昨年の「音展」で日本にも多くのファンを獲得した Lyn Stanley さん。今年のハイエンドショーにも登場し、あちらこちらのブースのサウンドデモに華を添えていた。この EAR のブースでは彼女の LP アルバムの他、新作 Interludes のアナログテープのサウンドデモが行われ、彼女もまた歌いだし観客が湧いたシーンも見られた（写真 31）。

今回のショーで、アナログ復興を一過性のセンチメンタリズムではなく、その真の魅力を突き止め加速していくことが必要だと感じることができた。同時にハイレゾのダウンロードミュージックソフトの充実と環境整備、さらに高級ヘッドホン／イヤホンとポータブル DAP により手軽に高音質な再生ができる環境を作りあげ、新しいオーディオの道が拓いていくことがオーディオファンを増やし、また業界の活性化に結びつくということを確認したショーであった。

そして、このハイエンドショーにはオーディオの楽しみが溢れていて、ここに参加すること自体が楽しく、またここで多くの仲間に出会うことができる場であり、ここは文字通り「祭りの場」であるのだ。このショーに関しては次ページの井谷氏、山内氏からもレポートされているので合わせてご覧いただければ幸いである。

最後に、永年このショーで裏方と広報を務められ今回の取材にもご協力いただいた、ハイエンド協会広報事務局長、Renate Paxa 嬢をご紹介し謝辞を表したい。また筆者プロフィール紹介を兼ねてあえてツーショットの写真としたがお許しいただきたい（写真 32）。



写真 32. Renate Paxa さんと筆者。
腕に抱えているのは Renate さんから
頂いたドイツ・ハイエンド協会が制作
したサウンドデモ用 CD